

牛の仲間と学ぶ “護蹄研究会”を終えて

牛の削蹄師や獣医師が集まる第18回“護蹄研究会”が平成27年6月27日、東京大学農学部1号館において開催され、その目玉企画として「馬の装蹄から考えるフットケア」と題したシンポジウムの講師として講演を頼まれました。今回は、その講演の概要を紹介します。

【シンポジウム：馬のフットケアから考える！】

1. 馬の蹄葉炎の研究的な近況：桑野 睦敏
(JRA競走馬総合研究所)
2. 牛の蹄葉炎－馬とはここが違う：田口 清
(酪農学園大学)
3. 馬の蹄葉炎の最新装蹄療法1：竹田 信之
(JRA美浦TC競走馬診療所)
4. 馬の蹄葉炎の最新装蹄療法2：齋藤 重彰
(大和高原動物診療所)
5. 装蹄の原理原則－幼駒から競走馬まで－
：田中 弘祐(日本軽種馬協会)
6. 総合討論

5人のパネラーによる馬のフットケアを中心にしたシンポジウムの講師として、筆者は「装蹄の原理原則－幼駒から競走馬まで」と題した講演を行いました。

私が一番訴えたかったこと、それは、競走馬の肢蹄が本来の機能を正しく発揮するためには、子馬時代から肢蹄の健全性を維持しなければならないということでした。特に最近では、子馬の肢蹄トラブルが多発する傾向にあります。その要因の一つは、軽種馬生産地では以前と比べて、それらのトラブルが起こりやすい飼養管理環境へと変化していることが挙げられます。乳牛や肉牛の飼養管理環境の変化も気になるところです。

牛と馬では、飼養目的が異なりますが、まずは将来のアスリートを目指す軽種馬としての肢勢のあり方について説明しました。特に肢勢に異常があった場合の矯正法として、X脚を例に腕関節への荷重の偏りについて模式図で説明し、蹄への充填剤や張り出しプレート、強化用クロスなどの新素材を用いた矯正症例について解説しました。さらに子牛にも希に屈腱拘縮や突球がみられるとのことから、子馬に発生する屈腱拘縮やバレリーナシンドローム、Club Foot、突球の症状を説明し、その対処方法を説明すると共に、これらの異常が残存した場合の肢蹄への後遺症として、不同蹄や狭窄蹄についても説明し、その矯正法について述べました。

育成段階では、異常があっても積極的な矯正は

避け、悪化を防ぐ処置が望ましく、また成長や調教に伴う肢勢や蹄形の変化についても述べました。さらには繁殖牝馬の蹄の大切さについて理解を求め、手入れ不足や肢蹄異常による問題点を説明し、跣蹄(ハダシ)への効果的な保全法である4 Point Trimについても紹介しました。

最後にトップアスリートの生産・育成に向けて、馬管理者・装蹄師・獣医師の連携が不可欠であることを説明し、余談ながら、馬の蹄又腐爛などでは、牛の趾間腐爛治療用のFRパスタが使用されていることを紹介して講演を締めくくりました。

【総評】

護蹄研究会(会長 酪農学園大学教授 田口清氏)は、牛の下肢部のトラブルを未然に防ぎ、あるいは肢蹄トラブルへの最善の対処法を探求するために、牛削蹄師や獣医師はもちろん、牛の飼育に係わる関係者が一堂に集まり、経験談や研究成果の発表を軸に、様々な意見交換を行う研究会です。名称はいささか堅苦しいのですが、実態は牛のフットケアに取り組む有志の集まりです。

今回のシンポジウムは、馬の蹄の構造やトラブル、それらへの対処方法を学び、牛の肢蹄の管理方法や肢蹄トラブルの解消法へのヒントを探るために企画されたと聞いています。今回の講演のうち、私を除く4人の講師は、蹄葉炎関連の講演でしたが、蹄葉炎と言っても、馬と牛では、その実態が随分異なるようです。単蹄と双蹄の違いを踏まえて、馬の知識が牛のフットケアに少しでも役立ってくれることを期待したいところです。

ただし率直な感想としては、一般口演も、口演後の質疑応答も牛削蹄師の出番は少なく、獣医師中心で進み、牛削蹄師が獣医師と対等に意見交換するには、まだまだ難しい実情が窺われました。我々も生産地フットケアのレベルアップを目的に、装蹄師や獣医師による年2回のリム&フットケア・ワークショップという意見交換会を開催していますが、開業装蹄師からの症例報告を集めることには苦慮しているところです。それでもワークショップを継続することで、装蹄師が真に活躍できるワークショップに育つことを期待しています。諦めずに、一歩ずつですね。



護蹄研究会での講演